

Title	パネル・ディスカッション：コンテンツとコンテキストの統合的アーカイヴィングに向けて
Sub Title	
Author	三浦, 和己(Miura, Kazuki) 藤原, 忍(Fujihara, Shinobu) 上崎, 千(Uesaki, Sen) 後藤, 文子(Goto, Fumiko) 金子, 晋丈(Kaneko, Kunitake)
Publisher	慶應義塾大学デジタルメディア・コンテンツ統合研究センター
Publication year	2014
Jtitle	慶應義塾大学DMC紀要 (DMC Review Keio University). Vol.1, No.1 (2014. 3) ,p.23- 31
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集：DMC研究センターシンポジウム：第3回 デジタル知の文化的普及と深化に向けて： コンテンツとコンテキストの統合的アーカイヴィングに向けて
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO32002001-00000001-0023">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO32002001-00000001-0023</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## コンテンツとコンテクストの統合的アーカイヴィングに向けて

三浦和己（株式会社 IMAGICA）

藤原 忍（日本アイ・ビー・エム株式会社）

上崎 千（慶應義塾大学アート・センター講師）

後藤文子（慶應義塾大学アート・センター副所長 文学部准教授）

モデレーター 金子晋丈（DMC 研究センター研究員 理工学部専任講師）

金子：パネルディスカッションのモデレータは金子が務めます。よろしく願いいたします。早速ですが、パネリストのご紹介です。先ほどご講演いただいた御三方に加えまして、慶應義塾大学アート・センターの後藤先生にお越しいただきました。後藤先生の自己紹介に加えまして、講演を聞いていただいたコメント、感想や質問がございましたら、お願いいたします。

後藤：ご紹介にあずかりました後藤文子と申します。文学部で美術史研究に携わっており、現在はアート・センターの副所長しております。どうぞよろしくお願いいたします。前半の先生方のご講演をとて興味深く拝聴いたしました。私自身が人文学系の研究に携わっているということもありますので、その立場から考えましたことを少しだけお話させていただきます。ただければと思います。

さきほど上崎さんから紹介がありましたアート・センターは、舞踏家 土方巽、美術批評家 瀧口修造、詩人 西脇順三郎、ジャズ評論家 油井正一、また造形作家 イサム・ノグチといった人々の研究アーカイブを運営し、研究活動の一環として様々な展示や催しを企画・実施しております。近年では現場スタッフの活躍で、ニューヨーク近代美術館と共同プロジェクトを展開するといった機会も増えてまいりました。そうした中で海外の研究者がアート・センターを訪問して資料調査を実施されるということも日常的な状況になってきております。

ところで、慶應義塾大学アート・センターは資料のデータベース化にも取り組んでおり、本日の話にもありましたデジタル・アーカイブを視野に入っておりますが、その一方で日常的な仕事を振り返ってみますと、むしろそれとは対極的なアナログ・アーカイブとしての性格を強くもっていると言わざるを得ません。たとえば、アート・センターが保管する多様な資料の調査を目的として訪問してくる国内外の研究者に対して、スタッフにはアーキヴィ

ストとしての対応が求められています。私自身もこれまで実際に海外のアーカイブで調査を行ってまいりまして、その中で身をもって実感したことなのですが、たとえば研究者がアーカイブを訪ねて資料調査を行う場合、必ずしも一年間といったまとまった期間、現地に滞在し、そのアーカイブが所蔵している資料を隅から隅まで見落としなく網羅的に閲覧をするということはむしろ稀です。大概是1～2日、せいぜい一週間といった限られた時間の中で、アーカイブ資料を調査しなければならないことの方が多くでしょう。そうした時間的制約やさまざまな状況の中で資料に向かう時、本日も紹介のありました、きわめてピンポイントで或る資料を検索可能なシステムや人の力に頼らずに目当ての資料に到達しうるツールがあれば、調査は非常に捗ります。ですが、現実にはそうしたことの方が稀で、限られた時間の中で欧文のマニュスクリプトをすぐに読み解くことができないといったことに至るまで、さまざまな困難に直面します。そういう時に、資料を前にしながらいつも考えるのです。もしかすると今私の眼前に置かれている資料は私が本当に探している最善の資料ではなくて、自分の探している資料はもっと他のところにあるかもしれない。でも、まだその資料は自分の眼前には出てきていない。けれど調査に赦された時間は限られているから、とりあえずは目の前に置かれたこれらの資料を解読しなければいけない、と。実に稚拙な体験ではあるものの、この繰り返しの中でいつも考えますのは、「資料それ自体に纏わるコンテクスト」が重要であるのは言うまでもないことながら、そもそも調査を行うアーカイブそれぞれがどのような仕組みを備え、いかなる成立背景を、つまりアーカイブそれ自体のコンテクストを纏っているのか、そしてそのアーカイブの仕組みと成立の経緯を含むコンテクストの中で、この資料はなぜ今、アーキヴィストの手によって自分の前に出されてきたのだろうか、というこ



藤原 忍氏

とです。資料と閲覧者とアーキヴィストを結ぶコミュニケーションの質に関わる問いかけとも言えるこのことが、アーカイヴで資料調査を行う際、いつも頭の片隅のどこかにあります。これは、「アーカイヴ・プロセス」や「アーカイヴ・コ

ミュニケーション」という問題と繋がっているのではないのでしょうか。さきほど上崎さんが話された「インターフェイス」という問題も、おそらくこのあたりに関わっているのではないかと考えながら聞いておりました。あるいは、「アナログ的なデジタル」と「デジタル的なデジタル」の違いについて文系の私などにも理解できるようにご紹介くださいました金子先生のお話、とりわけ「デジタル的なデジタルの可能性」も、もしかすると本質的には、私などがきわめてアナログな状況のなかで日頃感じている「アーカイヴ・コミュニケーション」や「アーカイヴ・プロセス」の問題に結びついているのではないかと思います。以上です。

金子：ありがとうございます。今、最後のお話を伺いながら、なるほど、アナログでもそのアーカイブのシステムを使いながら、裏でどんなシステムでそれが出てきたのかということを考えるのか、ということが私にとっては驚きでした。情報技術系の人間だと、どんな仕組みでこれは動いているのだろうかとか、どういうメカニズムになっているのだろうかとか必ず考えますよね。藤原さん、今のお話を伺っていかがですか？

藤原：伺っていて非常にわかる部分がありました。私自身は今どういうところを目指しているかということ、「アーカイブできるものはすべてアーカイブしよう」というところにいこうと思っています。

「なぜこれが残っているのか」ということを考えるのはとても重要なことです、たとえば放送局の方々とお話をしていると、またビジネスの話になってしまうのですが、コストゆえにあるものは削除する、分離をするという判断が発生する場合があります。つまり、その時々で、これは残す、これは残さないという判断が発生するわけです。その判断は

なぜ行われたのか、どういう基準で行われたのか。その基準が10年後、20年後正しいかどうかということとはわからないかもしれない。

このコンテンツが今ここに出てきたというのは確かに歴史があって背景があって、その背景は非常に興味深いと思います。私たちが技術的に対応しようとしているのはむしろその対極かもしれない、そういう判断がなくても残す。言い換えると判断基準、価値基準が変化していたとしても、それに耐えうるような形で残していかないといけないのかもしれないという考え方で技術的にアプローチしています。ですから、今のお話は非常に響きました。なるほど、ということ。

金子：私も後藤先生の話聞いて思ったのは、保存されてあるセットの中から、自分があるリクエストをして、その中でなぜこれが選ばれてきたのかということのポイントなのかなと思ったのですが。今の藤原さんの話は保存される前のステージについて、なんでこれは保存する方向に行ったのかというような気がしました。そのあたりの違いはどういうふうにお考えでしょうか。その違いというのは、保存されるまでの判断と保存されてから出てくるあとの判断は違うのか、別々のものなのか。これは連携させて考えるべきものなのか。そのあたりいかがでしょうか。

上崎：普段、なかなかタイミング合わなくて後藤先生とお話をする機会がありません。私はいつもこもって他のプロジェクトに関わっていたりします。今、お話をうかがって、「そうですね」と思いながら、「本当にそうですね」と思って聞いていました。

アーカイブで実際にアーキヴィストとして対応していますが、普段のアーキヴィストとしての仕事は資料整理とデータベースなどのプロジェクト、あるいはリサーチの受け入れです。特に夏休みなどは、日本の資料なのでやはり海外から多くの研究者が訪ねて来ます。みなさん、大抵は1週間くらいの日程でいらっしゃるわけです。例えば「荒川修作の書簡が見たい」と。荒川修作の書簡は瀧口修造文書の中に87通あるのですが、「87通もあるけれど、どのくらい日本語わかるの？」とか思いながら対応するのですが、実際には「ホテルはどこ？」「朝は何時に来られる？」みたいな話までしてあげないと、とても見られないわけです。しかも、「もうブラジルから来ました。通訳をやってくれる日本人の友人がいるはずなんですけど、連絡が取れない」

とか言い出されると、こちらもどうしようと思うわけです。そういう時は、即座にエデュケーション・プログラムを発動させて、誰か英語ができる学生にちょっとアテンドしてくれないかと頼み、その2人でいろいろ試行錯誤しながら資料を見る、といったことまでするわけです。そういった形でおそらくは、その都度、その都度のアテンダンスというリサーチャー対応がありますね。それはもうどうにもならないフルマニュアルのインターフェイス、人としてのインターフェイスがあるわけです。

全部資料が整理、保管されていて、データベースとしてインベントになっていて、外からでも目録が閲覧可能で、これを見たいと言ったらすぐに出てくるものがありますが、その背後に大量の未整理の資料を抱えているわけです。やはり未整理の資料もなるべく内容に詳しい人には見てもらいたいわけです。自分たちはルールに従って目録化しているだけなので専門家に見て欲しい。確かに、専門家が入ると面倒くさいことになる時もあります。「これは書簡じゃない。これは芸術作品です」みたいな面倒くさいことが起こることもあるのですが、でも色々な人の目に触れることが大事なので、未整理の資料もなるべく見せたいわけですね。しかし未整理の資料はさすがに目録もありませんから、ボンと箱を出して「これ見ろ」というわけにはいかないので、その分、時間を取られますよね。高度にデジタル化されていて、もはやフィジカル、アナログ、デジタルという垣根無しに、現物かダミーかということも考えずに経験できるようなものになっていけばいいのですが、その背後には大量にまだまだこれから手を付けなければいけないものが横たわっています。それは映画の累記もまさにそうですね。それに対する関心というものが一方でないと、いつまでも整理されたものだけが回され、ドライブされている状態だとよろしくないと思います。結果的にそこでは、どうしてもそこで関心を持ってやってくる人たちをハンドリングする人のスキルが問われます。おそらくアーキビストの職能の大半はコミュニケーション能力です。

金子：三浦さん、いかがですか？

三浦：テーマとして、アーカイブされるものの選別というところと、利用されるときの話だったと思います。映画の場合でいいますと、保存のためには何らかのメンテナンスの処置をしないといけないわけですが、実際にはある作品を保存のための処置をす

る、つまりアーカイブとして残すという決断をする時と、活用する時というのは基本的には同時に発生するわけです。「何らか活用の機会がようやくやってきたので、保存のためのメンテナンスができる」ということであって、そこは完全に一致しています。一方で、そのポリシーだけでやっていくと、人気のあるコンテンツに関しては問題ないのですが、残念ながら今は活用の機会が訪れていないという作品に対してはメンテナンスの処置がされません。そこに劣化が追いついてきて、失われてしまうということがあるわけです。ですから、コンテンツ・ホルダーさんとしては、今は活用の機会がないものであっても、その裏にある膨大なものはなんとかしてメンテナンスの処置をしたいと当然考えています。そのときの判断基準として、フィルムの劣化の状態、コンディションを知るところがまず第一歩としてはあります。しかし、では劣化の状態の悪いところから手を付けるのかというと、もちろんそうではありません。そのコンテンツに対して営業的な側面、つまり活用機会がなるべく早い時期に訪れるであろう作品というものをランキングしておいて、劣化の状態とランキングを関連づけて順番を決められるということが非常に多いのではないかと思います。そういう意味では、活用の選別をする機会というのと、活用として現れてくるというのは、極力一致させるような方向で日々努力をしている形ではないかと思います。

金子：個人的な、私が怠惰なだけなのかもしれないですが、パソコンを買い換えますね。そうすると何をするかということ、新しいデスクトップにオールドというフォルダーを作って、とりあえずこのやつを全部入れるということをするわけです。思い当たる方、半分ぐらいいらっしゃるのではないかと思います(笑)。今、三浦さんのおっしゃった使われるタイミングでその後の措置が決まるという話ですが、藤原さんのお話の中で、一度デジタルになったらまずはオンラインにしなきゃいけないんだという



三浦和己氏

お話があったと思います。デジタル化されたオンラインになるとと思いますが、デジタルになった瞬間に判断するという行為を捨ててしまっているような気がします。でも、机の上に紙束があったら、まず何をするかというと、横に置くという、忙しかったら横に置けるのですが、そうではない場合は見て捨てていくわけですよ。判断を強いられている。でもデジタルになった、パソコンになった瞬間に判断を放棄している自分があるような気がするのです。そのあたりで、デジタルと物というので、違いはあるのでしょうか。

藤原：デスクトップのお話はまさに自分もそうだなと思ってうかがいました。ただ、その判断するタイミングは必ずしもそのときに判断できないということも。それはそれがデジタルのデータであっても物質的な物の場合であっても、判断が即働くかという、必ずしもそうとは限らないかなと思います。

金子：もちろん判断できないことがあると思います。それも、おそらくアーカイブの理論的なところでちゃんと言われている話だと思うのですが、判断ができなかったらとりあえず先延ばしにするというのも一案だと思うのです。判断をしないということが当たり前になってくるとか、もしくは判断をしなくてもいいのではないかと、デジタルだったらなんとかなるのではないかとかという方向に向かっていくような気がするのですが。別の質問をすると、ちゃんと整理されていないとデジタルは活用できないのか。ちゃんと整理されていなくてもさきほどの機械学習とかを使ってアクセスできるようになることを人間は期待しているのか。そもそもそれはあきらめるべきなのか。そこのスタンスはアナログとデジタルで違うのでしょうか、一緒なのでしょうか。



上崎 千氏

藤原：興味深い話です。これはどちらか一方の答えになるのではないかなと思っています。私もデスクトップの整理はできません。これはヒューマンネイチャーだと思います。よくある話で、人の引っ越しの片づけはできるのですが

自分の引っ越しの片づけはできないですよ。押し入れの中を見てしまうと、もうそれで終わりになってしまう。ということから考えると、価値の判断をするのはおそらく不可能ではないでしょうか。ですから、すべてを保存するわけです。さきほど整理という話が出てきましたが、重要なのはそこから必要なデータを取り出せること。取り出せる方法さえあればそれは無秩序ではないという考え方ができるのではないかなと思っています。

私のこうした考えは、地方のケーブルテレビ局さんを回った結果としてあります。最近の経営状況は決して良くないのです。NTTさんですとか、ジェイコムさんですとか非常に大手の方々がいわゆるインターネットサービスということでケーブル事業をやられている方々のビジネスに入り込んでいることもあって。私が大変危惧しているのは、地方のケーブルさんが何10年もかけて溜めこんだ地方の非常にディープな、決して首都圏には存在し得ないような、時系列で見た、時間軸で見た歴史的なコンテンツがたくさんあるのですが、それが経営判断によって捨てられようとしているのです。それは困るわけで、再利用してお金が回る仕組みを作ろうというのが実は本質的な気持ちです。

ここで分類する、判断するということを考えましょうということになると、さきほど私のスライドを見ていただいたところで段ボール箱に入っているビデオテープだとか棚に入っているビデオテープの写真がありましたけども、あれはまさにそのケーブルさんのところの写真なのです。段ボール箱のテープは基本的に捨てられるわけですね。無条件に捨てられてしまうと思うのです。最近使っていないテープだからです。私に対してすごく危惧を思うのは、例えば東北地方の何でもない街並み、何でもない通りの映像がたくさんあったと思うのです。それが経営的にみればゴミなのです。再利用しないだろうからという理由で。けれども何らかの事情によって、たとえば3.11があったわけですが、その街がなくなってしまいましたよというときには、その映像というのは非常に貴重な資料になるわけです。何が起きるかわからない中で、今の経営判断だとか価値判断でそこを分類してしまうというのは非常に危険ではないのかなと思います。私たちの会社では、アーカイブというのは天然資源、ナチュラルリソースであると言っています。これをどのように活かすのかということが

私たちエンジニアの課題であるという設定がありますので、それはそれで「そうかな」と思います。ただ、現実問題として取捨選択していかないとコスト的に追いつかないということもあるので、また新たにデジタルジレンマに入るのですが、それはなんとかしなければいけない領域ということで、非常に重要な研究テーマだと思います。

上崎：今、藤原さんのお話で必要なものが常に取り出せること。これを1つプリンシパルとしましょうというお話だったのですが、では必要ではない、差し当たりニーズがないものたちはそのときどういうステータスを持っていけばいいのでしょうか。アーカイブというのは、圧倒的なその他というか、その他諸々の全面展開なのですよね。明らかにあからさまにお宝というのは一部です。アーカイブにおいては、非常に貴重な、歴史的にも重要で、かつ著名で、貸し出すときの保険額も高くつく、というものの隣に、二束三文という言い方は変ですけども、誰も知らないような人からの手紙であるとか写真であるとかが並ぶわけです。時系列で並べていくと、貴重なものとそうでないものという分け方をしないのでそうなってしまいます。一応一通りは必要なものは引き出せるようなシステムができたあとに、差し当たり認知が低くて必要とされていないもの、マイナーなものが突然上がってくるときがあるわけです。いつだって歴史研究というのはそれが反転する瞬間が何度も起こりますので。そういった事態に備えるという意味では、おそらく単に必要なというニーズがあって、それに対して答えられるだけでは、アーカイブはあまりにもストレージング、無駄なものを抱え込み過ぎているような気がするのですが、その辺りのことはどうお考えですか？

三浦：そこもコストがかなり密接に関わってくると思います。デジタルになっているものから考えるとやはりデータ量が大きければ大きいほど当然コストがかかってくるわけです。おそらくそこで分離しないといけないのが実データとメタデータの部分だと思います。IBMさんでも提供されている映像アーカイブのシステムというのはだいたいそうだと思いますが、基本的に実データはオフラインというか、すぐにアクセスできないところであって、メタデータだけのところだけが表に出ている。あるいはその実データの何分の一かのサイズにした、いわゆるプロキシデータと呼ばれるようなものがオンラインにあるというような形でコストと利便性の

バランスを取っているというところがあると思いますので、おそらくそういうあまり活用されないコンテンツに対してもせめてそのメタデータをなるべく他の人気のあるコンテンツとフラットな状態でアクセスでき



後藤文子氏

るようにしておいて、かつ実データの保存はなるべくコストを抑えているというのがおそらく一番現実的な選択肢ではないかと思います。基本的にアーカイブされているものの価値が出てくるのはいつかわからないというのは当然あって、網羅的に保存するというのが一番理想的であろうとは思いますが。それがたとえばデスクトップの例でいきますと、パソコンの性能がどんどん上がって行って、データの容量がどんどん上がっていく。だから、古いデータをそのままホールドしていても許す土壌がある。コストもそれに見合った形で安くなっていくわけですから、結局は網羅的に残した方がいいというのは当然ながらそれを現実的に運用できるような形で技術の方が追いついていくかどうか。そこが一番ポイントになってくるのだらうと思います。

金子：一昨日ぐらいに大学院の授業で使ったスライドを今ふと思い出しました。それは何かというと、スライドの容量の伸びとそれを処理するCPUの処理能力の伸びです。ストレージ容量については年々、藤原さんが一番ご存知だと思いますけども、ログスケールで伸びていっています。溜めることについては技術的には何ら問題ない。しかしながら、それを処理するCPUの能力はもう既に頭打ちになっています。数を増やさなければいけない。1つのCPUが処理できるのは、昔はほとんど右肩上がりで上がっていたのですが、もう頭打ちになっています。そういう状況において、今の「溜めておけばいい」というロジックは果たして成り立つのでしょうか。

藤原：我々の会社の研究所の議論を聞いているのではないかと思うぐらい的を得ていますね。溜めるということに関しては実は問題になっていないです。産業界のほうも製品を提供していますし、YouTube



金子 晋丈

であれ、Googleであれ何であれ、いわゆるストレージが枯渇してサービスできませんというふうに陥った企業はどこもないですよ。そういうところでいわゆる警告を出している人たちもいません。問題は金子先生がおっしゃられた

ところで、データの移動が問題になっています。巨大なデータになって、それを処理するとした場合には、たとえば1つのパソコンの中を見ても、ハードディスクがあって、それをメモリーに取りこんで、キャッシュに入れてCPUで処理するというのが起きるわけですが、扱うデータが大きければ大きいほど非常に大きな負荷がかかります。そこをどのように減らしていくのかということが今研究所のテーマの1つになっています。三浦さんからお話がありますが、1つのやり方としては代理処理というのがあります。これは金子先生のお話のなかにあったデジタル的なデジタルアーカイブかもしれないですが、いわゆる1つの写真を見た場合にアナログ的には1枚の写真は1枚の写真なのですが、デジタル的に見た場合にはすごく高解像度の写真もあれば低解像度の写真もあります。色々なバリエーションもある。要はグレースケールもあるだろうというような話もあります。さきほど分析技術の話をちょっと話しましたが、分析技術に必要な最低限の解像度というものもあります。ということは、本当に必要なオリジナルなデータ、要は再利用が効く、再加工が効くオリジナルなデータはどこかにあったとしても、実際に運用上使うのは代理データであって、その代理データは今のデータ移動も考慮しながら、必要最低限なものにしていく。そのなかで必要な分析結果が得られるようにしていくというのがおそらくこれからのテクノロジーのトレンドになると思います。というようなことを議論しているって聞いていましたか？みたいな話なのですが。(笑)

金子：ここのあたりでちょっと来ていただいているみなさんのほうからも質問を受け付けたいと思います。いかがでしょうか。

参加者：今日は非常に興味深いお話をお聞きできました。言葉の定義についてちょっと疑問に思ったので、みなさんに教えていただきたいと思います。今日はアーカイブ、ミュージアムと出てきましたが、その他にもプリザーベーションというのがあって、この3つの使い分けというか、レンダーによっているのか、元に完全に戻ることを重視しているのか、探すことを重視しているのかとかいろいろ定義あると思うのですが、みなさんの中での使い分けの基準というのがありますか。

上崎：私は、もしもこのアーカイブという用語をここで厳密に決めるとなったらどこまでも厳密になります。ただ、どこまでも柔軟にもなれます。たとえば、ファイルを圧縮するときのアーカイブという言葉、あれは圧縮という意味で、アーカイブには何か大きなものを圧縮するイメージがいろいろあるわけですね。あるいは単純にメールが来たときに後ろに回してしまうこと。Gメールでは、あれもアーカイブといいますよね。いろんなレベルでアーカイブという言葉が使われています。今おっしゃったアーカイブ、ミュージアム、そしてプリザーベーションとお話がありましたが、私どもが物を、個人文書であるとか、組織文書であるとか、さきほど後藤先生からお話があったような資料を実際に扱っている場所、文書館としてのアーカイブのやり方としてここで話を始めてしまうと、どこまでもデジタル的なデジタルアーカイブの議論から離れてしまいます。どこかで実際それは絡み合っているものですが、そことなるべく並走したいがためにある程度のアーカイブという用語の振りを許容しながら今お話をできています。私がもし厳密にアーカイブを定義するとしたら文書を蓄積する場所であり、そこにはファインディングエイド、つまり目録があり、そこにはアーキビストもいて、そしてそれが図書館と同じように利用される施設であり、そこには公文書と私文書があり…。この話をしていくと、どんどん今日の主旨と離れていってしまうので、だいたいこんな感じで私はアーカイブの厳密さ、アーカイブの振れ幅について柔軟に考えているという回答です。

金子：後藤先生はアーカイブとミュージアムの違いはどうお考えですか。

後藤：ミュージアムにもまた様々なミュージアムがあります。美術館と博物館は区別されるのです。そして博物館にも、自然史系の博物館、歴史系の博

物館など多種の博物館があります。そのうえで、作品ないし作品に相当する資料を展示する場所がミュージアムだとすれば、アーカイブは作品そのものではなく、むしろ作品や作者に関連する文書類を中心に保管している場所であると理解しています。

金子：じゃあ、三浦さん。プリザーベーションとアーカイブの違い。

三浦：もちろん私自身はそういった言葉の定義とかに関しては素人なわけですが、映画の話でいきますと、日本の中心的なフィルムアーカイブは東京国立近代美術館フィルムセンターですが、美術館の下にある機関なわけですから、そもそもその時点でミュージアムとアーカイブと切り分けられるのかということもあります。私が伺ったところでは「ミュージアムではたとえば誰々美術館とか、ある作家に紐づいたものがゴソッと置いてある。対してアーカイブは、たとえば政府で公開されている公文書を常に法律に則ってすべて保管している。つまりミュージアムは選択的であるけれども、アーカイブは網羅的である。」というような説明を受けたことがあります。そういう納得を私の中ではしています。

上崎：今の選択的と網羅的の違いというのは、アーカイブとセレクトディブなものを比較する非常にいい例ですね。ただし、フィルムアーカイブの例で思い出したのですが、フィルムアーカイブというのはアーカイブ一般のなかでも非常に特殊な位置にいて、要するにフィルム作品そのものを扱う場所ですよ。それゆえにミュージアムなのかアーカイブなのかという、さきほど後藤先生がおっしゃったような作品なのか資料なのか。選択的なコレクション、あるいはセクションを持つ場所と非選択的なアーカイブ的なレベルでの資料体を持つ場所との違いはできるわけです。我々は一般的に紙ではない資料のことをノンペーパーマテリアルというふうに呼んで、忌み嫌うわけじゃないですが扱いが大変なんですね。フィルムもそれに入ります。フィルムはさきほども触れましたがビネガーが起こるので酸っぱいんですね。紙は湿気がある程度上げた状態で温度と湿度で管理するのですが、フィルムは温度を下げて乾燥させてというまったく紙と事情が違います。我々が呼んでいるノンペーパーマテリアルのなかにフィルムも含まれるのですが、一方でフィルムアーカイブの方々はフィルム以外の資料のことをノンフィルムマテリアルと呼びま

す。これは折り合いつかないですよ。そもそも生息環境が違うとか、作業環境が違うとか。この反転というのはすごくおもしろいなと思って。すいません、補足です。

金子：デジタルになっていったときに、藤原さんも「インフラですから」ということをおっしゃっていました。「中には踏み込めません」と。そうすると、今までのノンフィルム、ノンペーパーの世界観と、一方でインフラ側としてはドンと来いという立場とあります。しかし、実際に動かす人、使う人は前と変わらないわけです。そういったギャップについてはみなさんどうお考えですか？

藤原：それは、どういう立ち位置で今回の話を議論するかによるのではないかと思います。今の設問に対してもそうですが、みなさんのミュージアム、アーカイブ、プリザーベーションということに対する定義の仕方、とらえ方と、ITをやっている私の捉え方は実はまったく違っています。ですから、今の設問も大変難しいと思います。

まず、アーカイブと考えたときに、私たちはデータのライフサイクルの研究というように考えます。アーカイブデータの対極にあるのはアクティブデータになります。いわゆる日々のトランザクション、または編集とかそういうもので言えば、カメラで撮ってきて、今編集機に入っているデータ。そういうものがアクティブデータになります。編集し終わった素材、または仕上がった番組で放送が終わったもの。それはアーカイブに分類されます。これはどういう視点で分離を進めているかということ、データのライフサイクルで分類を進めています。

一方プリザーベーションというのは、データ自身ではなくて、データの周辺にあるテクノロジー、テクノロジーライフサイクルの研究になります。といいますのと、今日も金子先生の講演で、古い、いわゆるブラウザとかプレイヤーのそういうソフトにどう対応するのかという話がありましたけれども、プリザーベーションというのは1つのファイルを考えただけの場合に、その再利用局面における外部依存性の研究です。要はPDFのファイルがあった場合にはアクロバトリーダーがないと読めない。このアクロバトリーダーはウィンドウズ7でしか動かない。そういうような話の外部依存性の分類なんですね。ということで、プリザーベーションの研究は外部依存性の研究であると。

ミュージアムというのは再利用局面の研究に分類



されます。どのように使っていくのか。要はレビューしてもらうのか更に分析するのか、いずれにせよ二次利用の局面の話になります。これがIT屋の分類になるので実作業されている方とは全然立ち位置が違いますね。さきほど振っていただいた質問のまったく答えになっていませんけれども、なかなか難しい問題です。いわゆるインフラで考えるのかコンテンツで考えるのか、日々の作業で考えるのか。またはその価値自身で考えるのか。立ち位置によって答えは必ずいぶん違うのかもしれないという印象を持ちました。

金子：クイッククエスチョンですけど、立ち位置が違うことによって、システムなりインフラなり、ワークフローなりは変わるのでしょいか。それは共有、共通化されるんでしょうか。

藤原：変わると思いますね。

金子：変わる。そうすると、たとえばある組織のなかでIT部門が強い組織とユーザーが強い組織とアーキビストが強い組織と3パターンあったとして、それぞれ導入するシステムは変わってくるというような印象を持ちます。頷いてらっしゃる三浦さん、いかがですか。

三浦：たとえば私にとって身近なところでいくと、同じ映像編集をするというところでも、ある再生速度が保たれなければならない作業環境とか、コピーするにもすごい時間がかかるけれどもとにかくコストを抑えたいとか、容量を出来るだけ多く持ちたいとか、様々なニーズがあります。最適化のことを考えた場合、どうしてもそのシステムは、たとえばインターフェイス以外の部分でインフラレベルから違ってくるのではないのでしょうか。それも結局技術的なボトルネックの話になるのかもしれないですが。そういったもの、たとえばボトルネックがぐっと上がって、コストもほとんど同じですと。そこになったら始めてインフラも共通して考えていいのかもしれない。そういう部分は、

あるブレイクスルーがない限りはそのシステムも別のものになるんじゃないかなという印象です。

金子：そのシステムが別のものになる、つまり別のシステムが出来上がっていくわけですね。そうすると、担当者が変わるとデータコピーが発生します。データコピーしてちょっとリネームします。リネームしただけで、本体は一緒です。次はIT屋がデータを処理する。ファイルネームが違うから、これは違うデータで保存しておかないといけない、となって2倍できるわけですね。IT屋は用心深いですから、「ちょっとこれ、重要だから3倍ぐらいバックアップ取っておこうか」といって3倍にしてしまう。一気に6倍になっていくわけですね。これは一組織の中ですらそうですけれども、これが色々な部署と連携、違う会社と連携しながら制作をやっていくことになっていくと、同じコンテンツ、同じデータが瞬間に増えていくという問題が出てきます。そういう問題が発生しても、システムは使い勝手によって分離すべきですか？

上崎：分離すべきか、という問題になってくると、統合ですよ。統合的アーカイヴィングの話ですから、今日は。どういうことかという、プレゼンテーションの中でもインターフェイスの話を強調しましたが、どこかでやっぱり共通の解明を持ちたいとは思っています。おそらく純然たるテクノロジーのレベルと、個別的な関心、インタレスのレベルというものが別々にあって、技術畑と一方で人文知一般あるいは文化一般の畑があってと考えたらどうでしょうか。ある程度うまくいけば、それも良いでしょう。ある程度いいマリーハイチが起こっているわけですから。でも、おそらくその中間にメディエイトするような人材、それがアーキビストかどうかは別として、技術的な面と内容的な面を仲介できるような人がいて、ある程度しかるべきインターフェイスを用意しないと、いつまでもどんどん技術が走って行って、どんどん研究は進んで行って、



しかし相変わらずいいインターフェイスとしては実現されないのではないのでしょうか。いいコンテンツというコンテンツの関係としては実現されないということがついてまわるのではないのでしょうか。そうなってくると、統合すべきか分離するべきかどうかと考えていくと、やはり人文系の側も常にそういった技術に対する関心を持たなければいけないし、その知識も持たなければいけないし、一方でそれにアクセスするための経路というものをもちないなとも思います。これってきっと金子さんあたりに聞いたらすぐに答えが出るんじゃないかと思いつつも、聞くのもちょっと恥ずかしいかなと思いつつも、あまりにも地味なのかなと思って、ちょっと自分で調べてみようかなとか思うわけです。データベースを作る際に、しばしばそういったことがスキーマの設計にはよく起こることです。そういったことについての議論を技術の人とコンテンツレベルの人たちが議論できるような環境がもうちょっとあっていいですね。あまりにもなさ過ぎます。確かにその落差のなかで一定量のビジネスが展開されているとは思いますが、そうした議論の場はもう少し当たり前になってほしいなとも思います。

金子：残念ながら時間となりましたのでパネル・ディスカッションを終了させていただきますが、この後も議論を続けていければと思います。パネリストのみなさん、ありがとうございました。(拍手)